



筑紫女学園大学リポジット

ジャイナ教聖典文献に見られる三種の推理について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-05-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 江崎, 公児, EZAKI, Koji メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/416

ジャイナ教聖典文献に見られる三種の推理について*

江崎 公 兎

On the Classification of three kinds of Inference in the *Anuyogadvārasūtra*

Koji EZAKI

0. はじめに

インド知識論において、正しい認識の根拠 (pramāṇa) の一つとして推理 (anumāna) があることはよく知られている。インドの初期の推理論は、推理を (1)pūrvavat、(2)śeṣavat、(3)sāmānyatodṛṣṭamの三種類に分類することが有力であったことも周知の通りである。そして、このような三種の推理について、従来、『チャラカ・サンヒター』、『方便心論』、『シャシュティ・タントラ』、『ニヤーヤ・スートラ』等の文献が主に取り上げられ、それぞれの論書における三種解釈が一定していないことも指摘されている¹。しかし、ジャイナ教聖典文献にも、三種の推理が説かれていることは殆ど知られていない²。そこで、本稿では、従来ほとんど言及されてこなかったジャイナ教聖典文献『アヌヨーガ・ドゥヴァーラ・スートラ』(*Anuyogadvārasūtra*)³を取り上げ、同書における推理の分類について紹介することにした。なお、同書の翻訳に際し、ADS (a) を底本とし、ADS (e)、Hanaki [1970] の英訳を適宜参照した。

1. 他論書における三種の推理

まず、三種の推理に関するこれまでの研究成果を踏まえ、『チャラカ・サンヒター』、『方便心論』、『シャシュティ・タントラ』、『ニヤーヤ・スートラ』に見られる三種の推理をまとめておく。既に述べたように、一般的に、三種類の推理として、(1)pūrvavat、(2)śeṣavat、(3)sāmānyatodṛṣṭamが知られている。これらの論書において挙げられる事例とともにこれら三種の推理を示せば以下のようになる。

(A) 『チャラカ・サンヒター』⁴

pūrvavat : 妊娠から過去の性交が推理される。

śeṣavat : 性交から未来の妊娠が推理される。

sāmānyatodṛṣṭam : 煙から火が推理される。

(B) 『方便心論』⁵

pūrvavat : 過去に六本指で頭にできもののある子供を見て、後に成人したその人物を見て、「デーヴァダッタ」という名前である事を知り、「彼はあの人だ」と知られる。

śeṣavat : 海水を飲んで塩味を経験し、後に水は全て塩辛いと知られる。

sāmānyatodṛṣṭam : 人が移動することを見て、太陽や月も運行するに違いないと知られる。

(C) 『シャシュティ・タントラ』⁶

pūrvavat : 雨雲から降雨が推理される。

śeṣavat : 川の増水から雨雲が生じたことが推理される。

sāmānyato dṛṣṭam : どこかで火と煙の結合を見て、煙だけから火一般が推理される。

[viśeṣatodṛṣṭam : 火と煙の結合を見た後、同じ煙から再度同じ煙について「これは同じ火である」とその存在が知られる。]

(D) 『ニヤーヤ・スートラ』⁷

pūrvavat : 川の増水から上流の雨が推理される。

śeṣavat : 蟻が卵を運ぶことの観察から降雨が推理される。

sāmānyatodṛṣṭam : クジャクの声からクジャクが推理される。

このように、基本的には、三種の推理は、過去から現在、現在から現在、現在から未来というように、時間的な区分に沿うものである。また、それぞれの推理の実例は、共通するものが多く、これらが当時広く認められていた推理の捉え方であると考えられるだろう。

2. 『アヌヨーガ・ドゥヴァーラ・スートラ』の場合

さて、『アヌヨーガ・ドゥヴァーラ・スートラ』に見られる三種の推理を見ることにする。『アヌヨーガ・ドゥヴァーラ・スートラ』では、まず、次のように述べられている。

ADS 440 : se kiṃ taṃ aṇumāṇe? aṇumāṇe tivihe paṇṇate / taṃ [jahā] — puvvavaṃ
sesavaṃ diṭṭhasāhammavaṃ /

[atha kiṃ tad anumānam / anumānaṃ trividhaṃ prajñaptam / tadyathā pūrvavat
cheṣavad dṛṣṭasādharmyavat]

では、その推理とは何か。推理には三種あると定められている。即ち、(1)puvvavaṃ (*pūrvavat)、(2)sesavaṃ (*śeṣavat)、(3) diṭṭhasāhmvavaṃ (*dṛṣṭasādharmyavat) とである。スートラは、それぞれの推理を実例を挙げながら説明している。そこで、以下では、三種の推理を一つずつ見ていく事にする。

2.1. puvvavaṃ

スートラはまず次のように言う。

ADS 441 : se kiṃ taṃ puvvavaṃ? puvvavaṃ —
[atha kiṃ tat pūrvavat / pūrvavat]

mātā (māyā) puttama jahā naṭṭhama juvāṇama puṇarāgataṃ /
kā paccabhiṇṇajjā puṇvaliṇṇeṇa keṇai //115//
[mātā putrama yathā naṣṭama yuvāṇama puṇarāgataṃ /
kācit pratyabhiṇṇiyāt pūrvaliṇṇeṇa kenacit //]

taṃjahā — khatena vā vaṇeṇa vā maseṇa vā laṃchaṇeṇa vā tilaṇeṇa vā / se taṃ puvvavaṃ /
[tadyathā kṣatena vā vraṇeṇa vā maṣeṇa vā lāṅchanena vā tilakena / tad etat pūrvavat /]

では、そのpuvvavaṃとは何か。puvvavaṃは〔以下の通りである〕。

「例えば、幼児期に失踪して、少年となって再び帰ってきた息子を、或る母親が何らかの以前の目印を通じて再認識することができるようなものである」(115)

例えば、〔この、以前見た目印、〕例えば、傷或いは怪我の痕・斑点・痣・しみによって〔再認識できる〕。以上がpuvvavaṃである。

注釈はpuvvavaṃを次のように説明する。'pūrva'とは、以前に認識された証相(liṅga)の事であり、'pūrvavat'とは、そのpūrvaを持つものであり、以前に認識された証相に基づいて、何らかの対象を理解させる推理のことである⁸。この例は、『方便心論』に挙げられる「前比」の例に挙がるものとほぼ一致すると考えられるだろう。

2.2. sesavaṃ

次に、sesavaṃである。スートラはsesavaṃに以下の五種を挙げる。

ADS 442 : se kiṃ taṃ sesavaṃ? sesavaṃ pañcavihaṃ paññattaṃ / taṃjahā — kajjeṇaṃ
kāraṇenaṃ guṇenaṃ avayaveṇaṃ āsaṇaṃ /

[atha kiṃ tac cheśavat / śesavat pañcavidhaṃ prajñaptam / tadyathā kāryeṇa kāraṇeṇa
guṇenāvayavenāśrayeṇa /]

では、その sesavaṃ とは何か。sesavaṃ には五種あると定められている。即ち、(1) 結果による [sesavaṃ]、(2) 原因による [sesavaṃ]、(3) 属性による [sesavaṃ]、(4) 部分による [sesavaṃ]、(5) 依存者⁹による [sesavaṃ] である。

注釈は sesavaṃ を次のように説明する。'śeṣa' とは、残余のもののごとであり、人の目的に資する知ろうと望まれている馬等といった対象とは異なるいななき等のごとである。そして 'śeṣavat' とは、その śeṣa を持つもののごとである¹⁰。この sesavaṃ の解釈は、『シャシュティ・タントラ』に見られる推理の定義とほぼ一致するものと考えられよう。

ṢT 123.8 : sambandhād ekasmāt pratyakṣāc cheśasiddhir anumānam /

[二者の間の]或る関係に基づいて、[一方の]知覚に基づいて他方を確立するのが推理である。

良く知られているように、ジネーンドラブディはディグナーガの『プラマーナ・サムッチャヤ』に対する注釈の中で『シャシュティ・タントラ』において推理の基盤となる関係として以下の七つが認められていたことを伝えている¹¹。

- (1) 所有者と所有物の関係：(例) 王と家臣の関係
- (2) 本質と変異の関係：(例) ミルクと凝乳の関係
- (3) 結果と原因の関係：(例) 馬車とその部品との関係
- (4) 動力因とその結果の関係：(例) 陶工と壺との関係
- (5) 素材と形成物の関係：(例) 枝等と木の関係
- (6) 共存の関係：(例) チャクラヴァーカのがいの間の関係
- (7) 害を加えられるものと加えるものとの関係：(例) 蛇とマンゲースの関係

一方、『アヌヨーガ・ドゥヴァーラ・スートラ』では、(1) 因果関係、(2) 属性と属性保持者の関係、(3) 部分と全体の関係、(4) 依存するものとされるものとの関係の四つが想定されていると考えられる。

2.2.1. 結果による sesavaṃ

スートラは結果による sesavaṃ の例として、次の事例を挙げる。

ADS 443 : se kiṃ taṃ kajjeṇaṃ? kajjeṇaṃ — saṃkhaṃ saddeṇaṃ, bheriṃ tālieṇaṃ, vasabhaṃ dhaṃkieṇaṃ, moraṃ kekāieṇaṃ, hayaṃ hesieṇaṃ, gayāṃ gulagulāieṇaṃ, rahaṃ ghaṇaghaṇāieṇaṃ / se taṃ kajjeṇaṃ /

[atha kiṃ tat kāryeṇa / kāryeṇa — śaṅkhaṃ śabdena, bheriṃ tāḍitena, vṛṣabhaṃ dhaṃkieṇaṃ (deśī), moraṃ kekāyitena, hayaṃ heṣitena, gajaṃ gulagulāyitena, rathaṃ ghanaghanāyitena / tad etat kāryeṇa]

では、この結果による〔sesavaṃ〕とはどのようなものか。結果による〔sesavaṃ〕とは例えば以下のようなものである。その音によって法螺貝、打撃音によって太鼓、鳴き声によって牛、ケーという鳴き声によってクジャク、いななきによって馬、ラツパのような鳴き声によって象、ガラガラという音によって戦車を〔推理するようなものである〕。以上が結果による〔sesavaṃ〕である。

ここに示されている例は全て、音声に基づいて、その音声の発生源を推理する事例であり、他の因果関係、例えば糸と布のそれ等は全く含まれていない点は注目に値しよう。音声とその発生源以外の因果関係、特に質量因的な因果関係に基づく sesavaṃ は、後で見るように「原因による sesavaṃ」に含まれる。

2.2.2. 原因による sesavaṃ

さて次に、原因による sesavaṃ について、スートラは次のように言う。

ADS 444 : se kiṃ taṃ kāraṇeṇaṃ? kāraṇeṇaṃ — taṃtavo paḍassa kāraṇaṃ ṇa paḍo taṃtukāraṇaṃ, vīraṇā kaḍassa kāraṇaṃ ṇa kaḍo vīraṇakāraṇaṃ, mippimḍo ghaḍassa kāraṇaṃ ṇa ghaḍo mippimḍakāraṇaṃ / se taṃ kāraṇeṇaṃ /

[atha kiṃ tat kāraṇeṇa / kāraṇeṇa — tantavo paṭasya kāraṇam na paṭo tantukāraṇam, vīraṇāni kaṭasya kāraṇam na kaṭo vīraṇakāraṇam, mṛtpindo ghaṭasya kāraṇam na ghaṭo mṛtpindakāraṇam / tad etat kāraṇeṇa /]

ではこの原因による〔sesavaṃ〕とはどのようなものか。原因による〔sesavaṃ〕は例えば以下のようなものである。糸は布の原因であって、布が糸の原因ではない。ヴィーラナ草はマットの原因であって、マットがヴィーラナ草の原因ではない。土塊は壺の原因であって、壺が土塊の原因ではない。以上が原因による〔sesavaṃ〕である。

原因による sesavaṃ は、これらの例から分かるように、「質量因的な因果関係にある二者 (x, y) のうち、x が y の原因であって、y が x の原因ではないことを推理する」というものであり、原因の特定化に対してのみ働くものと考えられる。

2.2.3. 属性による sesavaṃ

属性による sesavaṃ は次のように述べられる。

ADS 445 : se kiṃ taṃ guṇeṇaṃ / guṇeṇaṃ — suvaṇṇaṃ nikaseṇaṃ, pupphaṃ gaṃdheṇaṃ, lavaṇaṃ raseṇaṃ, madiraṃ āsāyieṇaṃ, vatthaṃ phāseṇaṃ / se taṃ guṇeṇaṃ / [atha kiṃ tat guṇena / guṇena — suvarṇaṃ nikaṣeṇa, puṣpaṃ gandhena, madiraṃ āsvāditeṇa, vastraṃ sparśeṇa / tad etad guṇena /]

では、この属性による [sesavaṃ] とはどのようなものか。属性による [sesavaṃ] とは以下のようなものである。試金石 [に付着した色] によって金、香りによって花、味によって塩、風味によってマディラ酒、感触によって衣服を推理するようなものである。以上が属性による [sesavaṃ] である。

この推理では、色・香り・味・風味・感触といった属性を通じて、その属性保持者が推理される。

2.2.4. 部分による sesavaṃ

部分による sesavaṃ をストラは以下のように説明する。

ADS 446 : se kiṃ taṃ avayaveṇaṃ / avayaveṇaṃ — mahisaṃ siṃgeṇaṃ, kukkuḍaṃ sihāe, hatthiṃ viṣāṇeṇaṃ, varāhaṃ dāḍhāe, moraṃ piṃcheṇaṃ, āsaṃ khureṇaṃ, vagghaṃ naheṇaṃ, camaraṃ vālagamḍeṇaṃ, dupaayaṃ maṇūsamāi, caupayaṃ gavamādi, bahupayaṃ gomhiyādi, sihaṃ kesareṇaṃ, vasahaṃ kakuheṇaṃ, mahilāṃ valayabāhāe / [atha kiṃ tad avayavena / avayavena — mahiṣaṃ śṛṅgeṇa, kukkuṭaṃ śikhayā, hastiṃ viṣāṇeṇa, varahāṃ daṃṣṭrayā, moraṃ picchena, āsvaṃ khureṇa, vyāghraṃ nakhena, camaraṃ vālagamḍeṇaṃ (deśi), dvipadaṃ manuṣyādi, caturpadaṃ gavādi, bahupadaṃ gomhyādi (deśi), siṃhaṃ keśareṇa, vṛṣabhaṃ kakudena, mahilāṃ valayabāhāe (deśi) /]

pariyarabaṃdheṇa bhaḍaṃ, jāṇijjā mahiliyaṃ ṇivasaneṇaṃ /
sittheṇa doṇapāgaṃ, kaim ca ekāe gāhāe //116//
[parikarabandhena bhaṭaṃ jāṇiyāt mahilāṃ nivasanena /
sikthena droṇapākaṃ kavim ca ekayā gāthayā //]

se taṃ avayaveṇaṃ /
[tad etad avayavena /]

ではこの部分による [sesavaṃ] とはどのようなものか。部分による [sesavaṃ] とは以下の

ようなものである。角によって水牛、トサカによって鶏、牙によって象、牙によって猪、羽によってクジャク、ひづめによって馬、爪によって虎、しっぽの一塊によってチャマラ鹿、二本足によって人間等、四本足によって牛等、他足によってムカデ等、たてがみによってライオン、こぶによって牛、腕飾りによって女性を推理するようなものである。

「腰帯によって戦士、飾りによって女性、一粒の煮えた穀物によって、一ドローナ分の穀物がゆ¹²、一つの詩頌によって詩人を知ることが出来る」(116)

以上が部分による〔sesavaṃ〕である。

部分による sesavaṃ は、部分と全体の関係に基づくものである。ただし、この推理が妥当なものとして働くためには、推理の対象である全体が、遮蔽物に覆われていること等の条件が必要となる。さもなければ、推理の対象が、眼前に存在するために、直接知覚だけで知られることになるからである¹³。

2.2.5. 依存者による sesavaṃ

ストトラは依存者による sesavaṃ を次のように述べる。

ADS 447 : se kiṃ taṃ āsaeṇaṃ / āsaeṇaṃ — agniṃ dhūmeṇaṃ, salilaṃ balāgāhiṃ,
vuṭṭhaṃ abbhavikāreṇaṃ, kulaputtaṃ sīlasamāyāreṇaṃ /

[atha kiṃ tad āsrayena / āsrayeṇa — agniṃ dhūmena, salilaṃ balākaiḥ, vṛṣṭim
abhavikāreṇa, kulaputraṃ sīlasamācāreṇa /]

iṅgitākāritair jñeyaiḥ kriyābhir bhāṣitena ca /
netravaktravikāraiś ca gṛhyate 'ntargataṃ manaḥ //117//¹⁴

se taṃ āsaeṇaṃ / se taṃ sesavaṃ /
[tad etad āsrayena / tad etac cheṣavat /]

では、この依存者による〔sesavaṃ〕とはどのようなものか。依存者による〔sesavaṃ〕とは以下のようなものである。煙によって火、鶴によって水、雲の変化によって雨、良き振る舞いによって、良家の息子を推理するようなものである。

「内心は、動き、表情、目に見える行為、言葉、目や顔の変化によって把握される」(117)

以上が依存者による〔sesavaṃ〕である。以上が^ssesavaṃである。

この推理の場合、上記の別のタイプの sesavaṃ と変わらないものも含まれているように見える。即ち、(1) の煙による火の推理は結果による sesavaṃ と、(3) の行儀の良さによる良家の出身であることの推理は属性による sesavaṃ とにそれぞれ相当すると考えられる。

以上に見てきたように、『アヌヨーガ・ドゥヴァーラ・スートラ』に説かれる sesavaṃ の特徴として、他の論書と比べてより豊富な具体的事例を四つの関係の枠組みにおいて分類し提示している点にあると言える。ただし、その分類は厳密なものではなく、その一部が重複している点には注意を払う必要がある。

2.3. diṭṭhasāhammavaṃ

次にスートラは第三の推理である diṭṭhasāhammavaṃ をさらに二種類に分類する。

ADS 448 : se kiṃ taṃ diṭṭhasāhammavaṃ / diṭṭhasāhammavaṃ duvīhaṃ paṇṇattaṃ /
taṃjahā — sāmānadiṭṭhaṃ ca viśesadiṭṭhaṃ ca /

[atha kiṃ tad dṛṣṭasādharmyavat / dṛṣṭasādharmyavad dvividhaṃ prajñaptam / tadyathā
— sāmānyadrṣṭam ca viśeṣadrṣṭam ca /]

では、この diṭṭhasāhammavaṃ とはどのようなものか。diṭṭhasāhammavaṃ には二種あると定められている。それは例えば、sāmānadiṭṭhaṃ と viśesadiṭṭhaṃ である。

2.3.1. sāmānadiṭṭhasāhammavaṃ

これら二種の diṭṭhasāhammavaṃ のうち、スートラはまず sāmānadiṭṭhasāhammavaṃ を次のように説明する。

ADS 449 : se kiṃ taṃ sāmānadiṭṭhaṃ / sāmānadiṭṭhaṃ — jahā ego puriso tahā bahave
purisā jahā bahave purisā tahā ego puriso, jahā ego karisāvaṇo tahā bahave kārisāvaṇā
jahā bahave karisāvaṇā tahā ego karisāvaṇo / se taṃ sāmānadiṭṭhaṃ /

[atha kiṃ tat sāmānyadrṣṭam / sāmānyadrṣṭam — yathā eko puruṣas tathā bahavo
puruṣaḥ yathā bahavo puruṣās tathā eko puruṣaḥ, yathā ekaḥ kāṛṣāpaṇas tathā bahavaḥ
kāṛṣāpaṇaḥ yathā bahavaḥ kāṛṣāpaṇās tathā ekaḥ kāṛṣāpaṇaḥ / tad etat sāmānyadrṣṭam /]

ではこの sāmānadiṭṭhaṃ とはどのようなものか。sāmānadiṭṭhaṃ とは次のようなものである。一人の人がいるのと同様に、沢山の人がある。沢山の人があるのと同様に、一人の人がいる。一枚のコインがあるのと同様に、沢山のコインがある。沢山のコインがあるのと同様に、一枚のコインがある。以上が^ssāmānadiṭṭhaṃ である。

スートラに挙げられる例は簡素すぎて分かりにくいですが、注釈では次のような具体的な論証式が提示されている。

論証式1¹⁵

[主張] この、今見ている一人の人間が、この〔人間の〕姿に限定されているのと同様に、ここでも、今見られていないたくさん人間はこの〔人間の〕姿を持っているものに他ならない。
[証因] 人間であるという点で違いがないから。もし、〔多数の人々が〕別の姿をしているとすると人間ではないことになってしまうから。

[喩例] 牛等のように。

論証式2¹⁶

[主張] これらの今見ている人々が、この〔人間の〕姿を備えているのと同様に、別の或る一人の人もこの〔人間の〕姿を備えるものに他ならない。
[証因] 人間であるから。〔その一人の人間が〕別の姿をしているとすれば、それ（人間）ではないことになってしまうから。

[喩例] 馬等のように。

これらの論証式から考えると、sāmannadiṭṭhasāhammavaṃとは、或るのがもつ性質／属性を根拠として、それと同種の集合に含まれる別のものを類推することであると考えられるだろう¹⁷。

2.3.2. visesadiṭṭhasāhammavaṃ

次にスートラは visesadiṭṭhasāhammavaṃ を次のように説明する。

ADS 450 : se kiṃ taṃ visesadiṭṭhaṃ / visesadiṭṭhaṃ se jahāṇāmae kei purise kaṃci purisaṃ bahūṇaṃ purisāṇaṃ majjhe puvvadiṭṭhaṃ paccabhiṇṇijjā — ayaṃ se purise, bahūṇaṃ vā karisāvaṇāṇaṃ majjhe puvvadiṭṭhaṃ karisāvaṇaṃ paccabhiṇṇijjā — ayaṃ se karisāvaṇe /

[atha kiṃ viśeṣadr̥ṣṭaṃ / viśeṣadr̥ṣṭaṃ atha (?) yathānāmakāḥ kaścit puruṣaḥ kaṃcit puruṣaṃ bahūnāṃ puruṣāṇāṃ madhye pūrvadr̥ṣṭaṃ pratyabhiṇṇiyāt — ayaṃ saḥ puruṣaḥ, bahūnāṃ vā karṣāpaṇānāṃ madhye pūrvadr̥ṣṭāṃ karṣāpaṇaṃ pratyabhiṇṇiyāt — ayaṃ saḥ karṣāpaṇaḥ /]

では、この visesadiṭṭhaṃ とはどのようなものか。visesadiṭṭhaṃ とは次のようなものである。或る人間が、沢山の人間の中で、以前に見た或る人を再認識することができる。「この人はあの人のだ」というように。或いは、沢山のコインの中で以前に見た或るコインを再認識することができる。「これはあのコインだ」というように。

この推理は、過去に知覚した特定の対象を、それと共通する性質／属性を持つ同種の集団の中から「これはあれだ」というように特定するものであると考えられる。sāmannadiṭṭhaṃにせよ、visesadiṭṭhaṃにせよ、『アヌヨーガ・ドゥヴァーラ・ストトラ』における diṭṭhasāhammavaṃ の例には、他の論書と異なり「人間の歩行との共通性に基づく天体の運行の推理」は見られず、より日常生活に密着した推理の例が挙げられていると考えられる。

2.4. 別の観点からの三種の推理

『アヌヨーガ・ドゥヴァーラ・ストトラ』は、以上のように、(1)puvvavaṃ、(2)sesavaṃ、(3) diṭṭhasāhammavaṃという三種の推理を述べるのであるが、これらは、他の論書に見られるものとは異なり、過去・現在・未来という三時の時間区分に直接関連するものではない。しかし、同書は、「推理には三時を対象とする把握作用がある」ということを次に論じている¹⁸。

ADS 450 : tassa samāsato tivihavaṃ gahaṇavaṃ bhavati / taṃjahā — tītakālagahaṇavaṃ paḍuppaṇṇakālagahaṇavaṃ aṇāgatakālagahaṇavaṃ /

[tasya samāsato trividhavaṃ grahaṇavaṃ bhavati / tadyathā — atītakālagrahaṇavaṃ pratyutpannakālagrahaṇavaṃ, anāgatakālagrahaṇavaṃ /]

それ（推理）には簡潔に言って三種の把握作用がある。それは例えば、過去時の把握、現時の把握、未来時の把握である。

以下にそれぞれを見ることにする。

2.4.1. 過去時の対象を把握する推理

ADS 451 : se kiṃ taṃ tītakālagahaṇavaṃ / tītakālagahaṇavaṃ — uttiṇṇāṇi vaṇāṇi nippaṇṇasassaṃ vā mediṇiṃ puṇṇāṇi ya kuṇḍasaraṇadidihiyātalāgāiṃ pāsittā teṇavaṃ sāhijjai jahā — suvuṭṭhī āsi / se taṃ tītakālagahaṇavaṃ /

[atha kiṃ tad atītakālagrahaṇavaṃ / atītakālagrahaṇavaṃ — uttiṇṇāṇi vaṇāṇi niṣpannasasyāṃ vā mediṇiṃ pūrṇāṇi ca kuṇḍasaraṇadidīrghikātaḍāgādīni dṛṣṭvā tena sādhaṇe yathā suvṛṣṭir āsīt / tad etad atītakālagrahaṇavaṃ /]

では、この過去時の把握とはどのようなものか。過去時の把握とは次のようなものである。〔人は〕草の伸びた森、穀物の実った大地、満水の水差し・湖・川・運河・池等を見た後で、その〔観察〕を通じて、「〔過去に〕雨が良く降った」というように論証することが出来る。以上が過去時の把握である。

過去時の対象を把握する推理は、『チャラカ・サンヒター』等に見られる pūrvavat と一致するものであることが分かる。これは、満水になった川等を見て、過去の降雨を推理するものである。

2.4.2. 現在時の対象を把握する推理

ADS 452 : se kiṃ taṃ paḍuppaṇṇakālagahaṇaṃ / paḍuppaṇṇakālagahaṇaṃ — sāhuṃ
goyaraggagayaṃ vicchaḍḍiyapaurabhattapāṇaṃ pāsittā teṇaṃ sāhijjai jahā — subhikkhaṃ
vaṭṭai / se taṃ paḍuppaṇṇakālagahaṇaṃ /

[atha kiṃ tat pratyutpannakālagrahaṇaṃ / pratyutpannakālagrahaṇaṃ — sādhuṃ
gocarāgryagataṃ viccharditapracurabhaktapāṇaṃ dṛṣṭvā tena sādhayet yathā —
subhikṣaṃ vartate / tad etat pratyutpannakālagrahaṇaṃ /]

ではこの現在時の把握とはどのようなものか。現在時の把握とは次のようなものである。乞食に出かけ、沢山の飲食物を貰った修行者を見た後、〔人は〕その〔観察〕を通じて、「〔今は〕食料が豊富だ」というように論証することができる。以上が現在時の把握である。

この推理の場合、沢山の飲食物の施しを得た修行者を見て、現在食料が豊富にあるという状況が推理される。

2.4.3. 未来時の対象を把握する推理

ADS 453 : se kiṃ taṃ aṇāgayakālagahaṇaṃ / aṇāgayakālagahaṇaṃ —
[atha kiṃ tad anāgatakālagrahaṇaṃ / anāgatakālagrahaṇaṃ]

abbhassa nimmalattaṃ kasiṇā ya giri savijjuyā mehā /
thaṇiyaṃ vāubbhāmo saṃjihā rattā ya ṇiddhā ya //118//
[abhrasya nirmalatvaṃ kṛṣṇā ca giris savidyun meghaḥ /
stanitaṃ vāyūdbhrāmaḥ saṃdhyā raktā ca snigdhā ca //]

vāruṇaṃ vā māhiṃdaṃ vā aṇṇayaṃ vā pasatthaṃ uppāyaṃ pāsittā teṇaṃ sāhijjai jahā
— suvuṭṭhī bhavissai / se taṃ aṇāgatakālagahaṇaṃ /

[vāruṇaṃ vā mähendraṃ vānyataraṃ vānyataraṃ vā praśastam utpātaṃ dṛṣṭvā tena
sādhayet yathā — suvṛṣṭir bhaviṣyati /]

ではこの未来時の把握とはどのようなものか。未来時の把握とは次のようなものである。

「雲の清浄さ・黒い山・雷を伴う雲・雷鳴・台風・赤く、湿っぽい朝」(118)

ヴァルナに属する星宿¹⁹もしくはインドラに属する星宿²⁰、或いは別の吉兆な予兆を見た後、その〔観察〕を通じて、「〔未来に〕良く雨が降るだろう」というように論証することが出来る。以上が未来時の把握である。

この例から分かるように、現在時における何らかの現象をもとに、未来の降雨を予想するのが、「未来時の把握」である。明らかに、この「未来時の把握」の場合には、経験に基づく予想という構図が当てはまる。或る現象が見られれば必ず未来に雨が降るといふことの保証は無く、単に、「雨が降るであろう」といふ予測に留まっている点で、この「未来時の把握」は、後代に言われるような「推理」の条件を満たしていない。

さらに、スートラはこれらの三時の把握において推論の根拠となる事象とは逆の事象に基づいて、それぞれ、逆の事柄を推理する場合が述べられている。

例えば、過去時の把握の場合には、草の枯れた森や干上がった川等を見て、過去に雨が降っていないこと²¹、現時の把握の場合には、乞食の成果が全く得られていない修行者を見て、現在、食料不足の状況にあること²²、未来時の把握の場合には、特定の降雨を阻害する星宿を見て、未来に雨が降らないこと²³がそれぞれ推理される。

3. 結 語

以上、『アヌヨーガ・ドゥヴァーラ・スートラ』に見られる三種の推理を見てきた。同書におけるそれらは、日常的に我々が行っているような、一種の「判断」に相当するものと言えよう。或いは、それらは、過去の経験に基づく推測や類推であるとも言える。また、同書に見られる「推理」は、特定の形而上学的存在等を主題とするものではなく、また、積極的に何らかの主張を他者に対し証明するといったような討論 (vāda) の性格も備えていないものである。さらに、少なくとも『アヌヨーガ・ドゥヴァーラ・スートラ』の記述を見る限り、五支作法等といった形式化された論証法も強く意識されていないと考えられる。

同書には、当時広く行われていた予測や推測のパターンを分類して推理に当てはめようとする努力が伺えるが、その分類の基準も厳密なものではない。また、他論書とは異なり、時間的な区分と三種の分類の対応は整合的ではなく、錯綜している。ただ、各分類の具体例の豊富さは他の『チャラカ・サンヒター』等の論書よりも際立っており、この点は『アヌヨーガ・ドゥヴァーラ・スートラ』の特徴の一つと考えられる。同書が提示するような「推理」が「果たしてこのような『推理』は確実なものなのか」といった問題意識を哲学者達に抱かせ、証因の備えるべき条件や推理の基盤となる関係についての考察を促し、インド論理学の発展を促進したことが十分に考えられる。

略号および参考文献

- ADS *Anuyogadvārasūtra* : (a) *Anuyogadvārasūtram, With three commentaries Jinadasa Gani Mahattara's Cūrni, Haribhadra Sūri's Vivṛti, Maladhari Hemacandra Sūri's Vṛtti*, Part II. Ed. by Muni Jambuvijaya, Jaina Agama Series No. 18 (2), Mumbai : Shri Mahavira Jaina Vidyalaya, 2000.
- (b) *Srimad Anuyogadvārasūtram, With Maladhari Hemacandra's Vṛtti*. Devacandra Lalbhai Jainapustakoddhara Fund Series No. 37, Bombay : Devacandra Lalbhai Jaina Pustakoddhara Found, 1916.
- (c) *Jinadāsagaṇi-viracita Anuyogadvāracūrṇi tathā Haribhadra-Ācārya-viracita Anuyogadvārasūtravṛtti*. [Ed. by Ānandasāgara.] Ratlam : Śrī Ṛṣabhadevaji Keśarīmaljī Śvetāmbara Saṃsthā, 1928.
- (d) *Anuyogadvārasūtra, Gaṇadhara Sudharmā Svāmī kṛta mūlasūtra tadupari Śrī Hemacandra Sūri kṛtā ṭikā tadupari Bhāṣāṭīkāśametā*. Ed. by Śrī Mohanmuni, Āgamasamgraha No. 44, Calcutta : Śrīyuta Rāya Dhanapatisiṃha Bahādur kā Āgamasamgraha, 1936 (Vikrama Saṃvat).
- (e) *Illustrated Anuyogadvār Sutra, Originally Text with Hindi and English Translations, Elaboration and Colourful Illustrations*, Part 2. Ed. by Up-pravartak Shri Amar Muni, The Illustrated Agama Series No. 12, Delhi : Padma Prakashan, 2001.
- BS *Bṛhatsaṃhitā : Bṛhatsaṃhitā of śrī Vārahamihirācārya, with the Commentary of Bhaṭṭotpala and Hindi Commentary by Nāgendra Pāṇḍeya*, Part 2. Ed. by Nāgendra Pāṇḍeya, Gaṅganātha Jhā Granthamālā vol.20, Varanasi : Sampurnanand Sanskrit University, 2005.
- CS *Charakasaṃhitā : The Charakasaṃhitā of Agniveśa, revisited by Charaka and Dṛidhabala with the Āyurveda-Dīpikā Commentary of Charakaṇḍidatta*. Ed. by Vaidya Jādavaji Trikamji, Bombay : Nirnaya Sagar Press, 1941.
- Frauwallner, Erich
1958 "Die Erkenntnislehre des klassischen Sāṃkhya-Systems", *Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und Ostasiens und Archiv für Indische Philosophie*, 2 : 84-139.
(*Kleine Schriften* に再録)

Hanaki, Taiken

1970 *Anuogaddaraim (English Translation)*. Prakrit Jain Institute Research Publication Series Vol. 5, Vaishali : Research Institute of Prakrit, Jainology and Ahimsa.

『方便心論』大正大藏經32卷No.1632.

桂 紹隆

1986 「インド論理学における遍充概念の生成と発展—チャラカ・サンヒターからダルマキールティまで—」『広島大学文学部紀要』45

NAVV *Nyāyāvatāravārtikavṛtti of Śrī Śānti Sūri*. Ed. by Dalasukha Malvaniya, Singhi Jain Series 20, Bombay : Singhi Jain Śāstra Śikshapitha Bharatiya Vidya Bhavan, 1949.

NBh *Nyāyabhāṣya (Vātsyāyana) : Nyāyadarśanam with Vātsyāyana's Bhāṣya, Uddyotakara's Vārttika, Vācaspati Mīśra's Tātparyaṭikā and Viśvanātha's Vṛtti*. Eds. by Taranatha Nyaya-Tarkatirtha and Amerendramohan Tarkatirtha. Calcutta Sanskrit Series No.18-19. 2 vols. 1st ed. Calcutta 1936-1944. Reprint, Kyoto 1982.

NS *Nyāyasūtra*. See NBh.

Puṇyavijaya, etc.

1968 *Nandisuttam and Aṇuyogaddārāim*. Eds. by Muni Puṇyavijaya, Dalsukh Mālvaṇiā and Amṛtāl Mohanlāl Bhojak, Jaina Āgama Series No.1, Bombay : Shri Mahāvira Jaina Vidyālaya, 1968.

Solomon, A. Esther

1976 *Indian Dialectics : Methods of Philosophical Discussion*, Vol. I. Ahmedabad : B.J. Institute of Learning and Research.

ṢT Ṣaṣṭitantra : See Frauwallner [1958].

Vivṛtti *Anuyogadvārasūtravivṛtti* (Haribhadra Sūri) : See ADS (a), (c).

矢野 道雄・杉田 瑞枝

1995 『占術大集成 古代インドの前兆占い2』、東洋文庫589、平凡社。

【註】

*本稿は、筑紫女学園大学・短期大学部平成19年度特別研究助成費（一般研究）の交付を受けて開催された、宇野智行博士（筑紫女学園大学）との「ジャイナ教論理学共同研究会」の成果の一部である。宇野博士からはテキストを始めとする種々の貴重な資料の提供を受け、また、草稿にも目を通していただき、様々な有益な助言を頂いた。記して謝意を表したい。

¹ 三種の推理に関しては、桂 [1986] に各学派の分類がそれ以前の研究成果に基づいてまとめられており、有益である。

² 本稿で取り上げる『アヌヨーガ・ドゥヴァーラ・ストトラ』における三種の推理については、極く簡潔に Solomon [1976 : 379-380]、また Malvaniya が NAVV の序文 (NAVV, Intro. LXVII) において紹介している。

³ 本書の成立年代は確定していないが、およそ紀元後300年以降と考えられている。Puṇyavijaya, etc. [1968 : Intro., 70-72] を参照した。

⁴ CS I 11.21-22 : pratyakṣapūrvam trividham trikālam cānumiyate / vahnir nigūḍho dhūmena maithunaṃ garbhadarśanāt //21// evaṃ vyavasyanty aitam bijāt phalam anāgatam / dṛṣṭvā bijāt phalam jātam ihaiva sadṛśam budhāḥ //22//

⁵ 『方便心論』25b9-17 : 比相云何。答曰。前已分別今當更說。比知有三。一曰前比。二曰後比。三曰同比。前比者。如見小兒有六指頭上有瘡。後見長大聞提婆達。即便憶念本六指者。是今所見。是名前比。後比者。如飲海水得其鹹味。知後水者皆悉同鹹。是名後比。同比者。如即此人行至於彼。天上日月東出西沒。雖不見其動。而知必行。是名同比。

また、桂 [1986 : 42] によると、ナーガールジュナの『中論頌』に対する青目の注釈『中論』にも『方便心論』と非常に類似した三種の推理が見られる。『中論』（大正30巻No. 1564, 24b7-15 : 若謂有三種比知。一者如本。二者如殘。三者共見。如本。名先見火有煙。今見煙知如本有火。如殘。名如炊飯一粒熟知餘者皆熟。共見。名如眼見人從此去到彼亦見其去。日亦如是。從東方出至西方。雖不見去以人有去相故。知日亦有去。如是苦樂憎愛覺知等。亦應有所依。如見人民知必依王。是

事皆不然。)

⁶ ŚT 124, 19-32 : gang gi tshe me dang du ba 'brel pa mthong nas du ba de kho nas me de kho na'i yang dang du me de kho na 'di'o zhes yod pa nyid du rtogs par byed pa'o // spyir mthong ba ni gang 'ga' zhig tu du ba dang me 'brel par mthong nas dus physis du ba tsam mthong ba las me spyir rjes su dpag pa'o // spyir mthong ba'i rjes su dpag pa 'di yang rnam pa gnyis te / snga ma dang ldan pa dang lhag ma dang ldan pa'o // de la snga ma dang ldan pa ni gang gi tshe rgyu ma thong ba med pa mthong nas 'bras bu 'byung bar 'gyur ba nyid rtogs pa ste / dper na sprin byung ba mthong nas char ba 'byung bar 'gyur ba nyid lta bu'o // lhag ma dang ldan pa ni gang gi tshe 'bras bu grub pa mthong nas rgyu byung zin pa nyid rtogs pa ste / dper na chu klung gсар du chu 'phel ba mthong ba nas sprin byung ba nyid lta bu'o //

⁷ 諸先行研究が指摘するように、推理の定義が与えられるNS 1.1.5においては、pūrvavat、śeṣavat、sāmānyato dṛṣṭamの具体例は挙げられていない。ただ、NS 2.1.37-38において、推理が正しい認識手段ではないという批判とそれに対する応答が見られ (NS2.1.37 rodhopaghātasādr̥ṣyebhyo vyabhicārād anumānam apramānam //38// ; naikadeśatrāsasādr̥ṣyebhyo 'rthāntarabhāvāt //〔遮断・破壊・類似性の点で逸脱があるから推理は正しい認識手段ではない (38)。そうではない。〔遮断・破壊・類似性のそれぞれは〕一部・恐怖・類似とは異なるものであるから (39)〕)、これらのスートラに対する『ニヤーヤ・バーシャ』をもとに、上に挙げるような三種の推理が例として上げられる場合がある。(NBh 514.5-516.10 : rohdād api nadi pūrṇā gṛhyate, tadā copariṣṭād vṛṣṭo deva iti mithyānumānam / niḍopaghātād api pipilikāṇḍasañcāro bhavati, tadā ca bhaviṣyati vṛṣṭir iti mithyānumānam iti / puruṣo 'pi mayūravāsitam anukaroti tadāpi śabdasaḍr̥ṣyān mithyānumānam bhavati //37// nāyam anumānavyabhicārah, ananumāne tu khalv ayam anumānābhimānaḥ / katham? nāviśiṣṭo liṅgaṃ bhavitum arhati / pūrvodakaviśiṣṭam khalu varṣodakam śighrataratvam srotaso bahutaraphenaphalaparnakāṣṭhādivahanam copalabhamānaḥ pūrṇatvena nadyā upari vṛṣṭo deva ity anuminoti nodakavṛddhimātreṇa / pipilikāprāyasyāṇḍasañcāre bhaviṣyati vṛṣṭir ity anumiyate na kāsāncid iti / nedaṃ mayūravāsitam tatsadr̥ṣo 'yam śabda iti viśeṣāparijñānān mithyānumānam iti / yas tu sadr̥śād viśiṣṭac chabdād viśiṣṭamayūravāsitam gṛhṇāti tasya viśiṣṭo 'rtho gṛhyamāṇo liṅgaṃ, yathā sarpādīnām iti / so 'yam anumātur aparādhonānumānasya, yo 'rthaviśeṣeṇānumeyam artham aviśiṣṭārthadarśanena bubhutsata iti //38//)。なお、周知のように、NS 1.1.5に対するNBhは、三種の推理に関して二種の解釈を提示している。それらを示せば、pūrvavat : (a) 原因による結果の推理 / (b) 煙による火の推理、śeṣavat : (a) 結果による原因の推理 / (b) 消去法、sāmānyatodṛṣṭam : (a) 人間の歩行との共通性に基づく天体の運行の推理 / (b) 欲求等に基づくアートマンの存在性の推理、である。

⁸ *Vivṛtti* : se kiṃ taṃ puvvavam ityādi, viśeṣataḥ pūrvopalabdham liṅgaṃ pūrvam ity ucyate, tad asyāstīti pūrvavat, taddvāreṇa gamakam anumānaṃ pūrvavad iti bhāvaḥ / (『ではその puvvavam とは何か』云々について。『pūrva とは、個々に、以前に認識された証相である』と言われる。そして、'pūrvavat' とは、それ (pūrva) を持つものである。それ (pūrva) を通じて、〔何らかの対象を〕理解せしめる推理が、pūrvavat である、ということである〕)

⁹ 注釈はこの 'āsaya' (*āśraya) を「拠り所」ではなく「依存する主体」と解釈する。*Vivṛtti* : tathāśrayeṇa agniṃ dhūmena, atrāśrayatīty āśrayo dhūma eva gr̥hyate. (『同様に、〔依存者による [śeṣavat]』とは、〔例えば〕『煙によって火を〔推理すること〕』である。この〔スートラ〕では 'āśraya' は依存する主体のことであり、まさに煙が言及されている) ; *Vṛtti* : se kiṃ taṃ āsaenam ityādi, āśrayatīty āśrayo dhūmabalākādih. (『では、その依存者による [śeṣavat] とは何か』云々について。'āśraya' とは、依存する主体のことであり、煙や鶴 (balāka) 等のことである))

¹⁰ *Vṛtti* : se kiṃ taṃ sesavam ityādi, puruṣārthopayoginaḥ parijñāsītāt turagāder arthād anyo heṣitādir arthaḥ śeṣa ihocyate, sa gamakatvena yasyāsti tac cheśavadanumānam / (『では、その sesavam とは何か』云々について。人の目的に資する、完全に知ろうと望まれた、馬等といったものとは別の、いななき等のものが、この〔スートラで〕śeṣa と言われている。その [śeṣa] を <知らしめるもの>として有するもの、それが śeṣavat という推理である))

¹¹ 桂 [1986 : 23] を参照。

¹² この例は青目の『中論』に見られる śeṣavat の例と共通している。注5を見よ。

¹³ *Vivṛtti* : āha — tadupalabdhou tasyāpi pratyakṣata evopalabdheḥ katham anumānaviśayatā? ucyate — vyavadhāne saty atītānumeyatvād vā na doṣaḥ / evaṃ śeṣodāharaṇayojanā kāryeti / navaraṃ mā(ma)nuṣyādiṣv avayavo 'bhyūhata ity eke, anye tu dvipadam ity evamādikam evāvayavam abhidadhati, manuṣyo 'yam, tadavinābhūtapadadvayopalabdhyanyathānupapater iti [/] (『【反論】 それ (牙) が認識されたとき、それ (ライオン) もまたまさに直接知覚に基づいて、認識されるのだから、どうして推理の対象なのか。【答論】 障害物がある時、或いは過去の推理対象であるから、過失はない。残りの例にも、同様に適用されるべきである))

¹⁴ Cf. *Manusmṛti* 8.26 : ākārair iṅgitair gatyā ceṣṭayā bhāṣitena ca / netravaktravikāraīs ca gr̥hyate 'ntargataṃ manaḥ //

¹⁵ *Vṛtti* : idam uktaṃ bhavati — nālikeradvipād āyātaḥ kaścit tatprathamatayā sāmānyata

ekaṃ kañcana puruṣaṃ dṛṣṭvā anumānaṃ karoti yathā ayam ekaḥ paridṛśyamānaḥ puruṣa etadākāra viśiṣṭas tathā bahavo 'trāparidṛśyamānā api puruṣā etadākārasampannā eva, puruṣatvā viśeṣāt, anyākāratve puruṣatvahānīprasaṅgāt, gavādivat /

¹⁶ *Vṛtti* : bahuṣu tu puruṣeṣu tatprathamato vikṣiteṣv evam anuminoti — yathāmī paridṛśyamānaḥ puruṣā etadākāravantaḥ tathāparo 'py ekaḥ kaścit puruṣaḥ etadākāravān eva, puruṣatvād, aparākāratve taddhānīprasaṅgāt, aśvādivad iti /

¹⁷ *Vivṛtti* : tatra **sāmānyadrṣṭam** — yathā ekaḥ puruṣaḥ tathā bahavaḥ puruṣā ityādi, sāmānyadharmasya tadbhāvagamakatvād iti / (『それらのうち、『sāmānyadrṣṭam』とは、「一人の人がいるのと同様に、多数の人々がいる』云々である。共通する属性は、その〔共通する属性〕を本質とするものを理解せしめるものであるから」

¹⁸ Hanaki [1970 : 166-167], Malvaniya (NAVV, Into.LXVII) はこれらの把握を diṭṭhasāhammavaṃ の下位区分とする。確かに『スートラ』は、これら三種類の把握を visesadiṭṭhaṃ の説明に直後に述べ、その後で、「以上が visesadiṭṭha である」とする (ADS 547 : ... se taṃ aṅgatakālagahaṇaṃ / se taṃ visesadiṭṭhaṃ / setaṃ diṭṭhasāhammavaṃ setaṃ aṅumāṇe /)。しかし、注釈ではこれら三種類の把握を「推理一般」の持つものとして説明している (*Vivṛtti* : **tasya samāsato** ityādi, **tasyeti** sāmānyenānumānasya **samāsataḥ** saṃkṣepeṇa **trividhaṃ grahaṇaṃ** bhavati / ; *Vṛtti* : tad evam anumānasya traividhyam upadarśya sāmpratam tasyaiva kālatrayaviṣayatām darśayann āha — **tassa samāsato tiviham gahaṇam** ityādi, **tasyeti** sāmānyenānuvartamānam anumānamātraṃ sambadhyate, tasyānumānasya trividhaṃ grahaṇaṃ bhavati.)

上記に見たように、visesadiṭṭhaṃ は、過去に知覚した特定の対象を、それと共通の属性を持つ同種の集団の中から特定して再認識することであるから、三時を対象とする把握全てが、この visesadiṭṭhaṃ に含まれるとは考えにくい。本稿では、『スートラ』において、この三種の把握はいわば傍論として挿入されていると解釈し、注釈に従った。

¹⁹ ADS (e) の英訳では、ヴァルナに属する星宿として、プールヴァシャーダー・ウツラバドラバダー・アーシュレーシャ・アールドラー・ムーラ・レーヴァティー・シャタピシャジュを挙げている。『ブリハット・サンヒター』によると、これらの星宿が見られると、「ヴァルナの地震」が起り、その際に大雨をもたらすとされている。『スートラ』はおそらくこのことを指しているであろう。BS 32.20-22 : pauṣṇāpyārdrāsleṣāmūlāhirbudhyavarūṇadevāni / maṅḍalam etadvāruṇam asyāpi bhavanti rūpāni //20// nīlotpalālibhinnāj janitviṣo madhurarāviṣo bahulāḥ / taḍidudbhāsitatehā dhārāṅkuravarṣiṇo jaladāḥ //21// vāruṇam arṇavasariḍāsritaghnam

aivr̥ṣṭidaṃ vigatavairam / gonardacedikukurān kirātavaidehakān hanti //22// (「レーヴァティ一宿、プールヴァシャーダー宿、アールドラー宿、アーシュレーシャー宿、ムーラ宿、ウッタラバドラパダー宿、シャタビシャジャヤ土はヴァルナに属する領域であり、その特徴は次の通り (20)。雨雲は、青蓮、蜂、砕かれた方鉛鉱 (アンジャナ) に似た色をもち、音甘く、大量で、雷光によってその光が照らされ、滝の雨という芽をもつ (21)。ヴァルナの地震は海と川に依存する人々を破滅させ、多量の雨をもたらし、敵対をなくし、ゴータルダ、チューディ、ククラ、キラータ、ヴァイデーハの人々を滅する (22)」訳は矢野・杉田 [1995 : 144]。)

²⁰ これもおそらく『プリハット・サンヒター』の以下の記述と関連しているだろう。BS 32.16-17 : abhijicchraṇadhaniṣṭhāprājāpatyaindravaiśvamaitrāṇi / surapatimaṇḍalam etad bhavanti cāpy asya rūpāni //16// calitācalavarṣmāṇo gambhīravirāviṇas taḍidvantaḥ / gavalālikulāhinibhā visr̥janti payaḥ payovāhāḥ //17// (「アビジット宿、シュラヴァナ宿、ダニシュター宿、ローヒニー宿、ジェーシュター宿、ウッタラーシャーダー宿、アヌラーダー宿はインドラの領域であり、その特徴は次の通りである (16)。揺れ動く山のような身体をもった雲が、大きな音をたてて稲妻をともし、水牛の群や蛇のような雲が、雨を降らせる (17)」訳は矢野・杉田 [1995 : 143-144]。)

²¹ ADS 455 : se kiṃ taṃ titakālagahaṇaṃ / nittaṇāiṃ vanāiṃ anipphaṇṇasassaṃ ca metiṇiṃ sukkāṇi ya kuṇḍasaraṇadidhatalāgāiṃ pāsittā teṇaṃ sāhijjati jahā — kuvuṭṭhī āsi / se taṃ tiyakālagahaṇaṃ /

[atha kiṃ tad atitakālagrahaṇaṃ / niṣṭṛṇāni vanāni aniṣṭpannasasyaṃ ca mediniṃ śuṣkāni ca kuṇḍasaraṇadīdrahataḍāgādīni dṛṣṭvā tena sādheyed yathā — kuvṛṣṭir āsit / tad etad atitakālagrahaṇaṃ /] (「ではこの過去時の把握とはどのようなものか。草の枯れてしまった森、穀物の実りがない大地、干上がった水差し・湖・川・泉・池等を見た後、その〔観察〕を通じて、『(過去に) 雨が降らなかった』というように論証することができる。以上が過去時の把握である」)

²² ADS 456 : se kiṃ taṃ paḍuppaṇṇakālagahaṇaṃ / paḍuppaṇṇakālagahaṇaṃ — sāhuṃ goyaraggagayaṃ bhikkhaṃ alabhamāṇaṃ pāsittā teṇaṃ sāhijjai jahā — dubbhikkhaṃ vaṭṭhai / se taṃ paḍuppaṇṇakālagahaṇaṃ /

[atha kiṃ tat pratyutpannakālagrahaṇaṃ / pratyutpannakālagrahaṇaṃ — sādhuṃ gocarāgyagataṃ bhikṣāṃ alabhamāṇaṃ dṛṣṭvā tena sādheyed yathā — durbhikṣaṃ vartate / tad etat pratyutpannakālagrahaṇaṃ /] (「では、この現在時の把握とはどのようなものか。現在時の把握とは次のようなものである。乞食に出かけて托鉢物を得てない修行者を見た後、その〔観察〕を通じて、『(今は) 食料不足だ』というように論証することができる。以上が現在時の把握である」)

²³ ADS 457 : se kiṃ taṃ aṇāgayakālagahaṇaṃ / aṇāgayakālagahaṇaṃ — aggeyaṃ vā

vāyavvaṃ vā aṅṅayaraṃ vā appasatthaṃ uppāyaṃ pāsittā teṇaṃ sāhijjai jahā — kuvuṭṭhi bhavissai / se taṃ aṅṅatakālagahaṇaṃ /

[atha kiṃ tad anāgatakālagrahaṇaṃ / anāgatakālagrahaṇaṃ — āgneyaṃ vā vāyavyaṃ vānyataraṃ vāpraśastam utpātaṃ dṛṣṭvā tena sādhyed yathā — kuvṛṣṭir bhaviṣyati / tad etad anāgatakālagrahaṇaṃ /] (「では、この未来時の把握とはどのようなものか。未来時の把握とは次のようなものである。アグニに属する星宿もしくはヴァーユに属する星宿或いは別の不吉な予兆を見た後、その〔観察〕を通じて、『〔未来に〕雨は降らないであろう』というように論証することが出来る。以上が未来時の把握である」) ここで言及されるアグニに属する星宿と雨が降らないことの関係、及びヴァーユに属する星宿と雨が降らないことの関係は、前と同様、以下の『プリハット・サンヒター』に説かれるものと関連しているだろう。BS 32.12-14 : puṣyāgneyaviśākhābharaṇīpitryājabhāgyasaṃjñāni / vargo hautabhujō 'yaṃ karoti rūpāṅy athaitāni //12// tārolkāpātāvṛtamādīptam ivāmbaraṃ sadigdāham / vicarati marutsahāyaḥ saptārciḥ saptadivasāntaḥ //13// āgneye 'mbudanāśaḥ salilāśayasaṃkṣayo nṛpativairam / dadrūvicarcikājvaravisarpikāḥ pāṇḍurogaś ca //14// (「プシュヤ宿、クリッティカー宿、ヴァイシャーカー宿、バラニー宿、マガー宿、プールヴァバドラパダー宿、プールヴァパルグニー宿はアグニの領域であり、次のような特徴をもつ (12)。空は流星や隕石で覆われて照るが如きになり、四方の空焼けをとまなう。七つの光をもつ火が風とともに七日間広がる (13)。アグニに属する地震があると、雲はなくなり、水の貯蔵場は干上がり、王の反目があり、頑癩(ダドルー)、乾癩(ヴィチャルチカー)、熱病、丹毒、黄疸がおこる (14)」訳は矢野・杉田 [1995 : 143]) ; BS 32.8-10 : catvāryāryamaṇḍāyāny ādityaṃ mṛgaśiro 'śvayuk ceti / maṅḍalam etad vāyavyam asya rūpāṇi saptāhāt //8// dhūmākulikṛtāśe nabhasi nabhasvān rajaḥ kṣīpan bhaumam / virujan drumāṃś ca vicarati ravirapaṭukarāvabhāsi ca //9// vāyavye bhūkampe sasyāmbuvanauṣadhikṣayo 'bhīhitaḥ / śvayathuśvāsonmādajvarakāsabhavo vaṇikpīḍā //10// (「ウッタラパルグニー宿をはじめとする四つとプナルヴァス宿とムリガシラス宿とアシユヴィニー宿(あわせて七宿)はヴァーユの地震の領域(マンダラ)であり、七日前に〔現れる〕姿は— (8) 四方が煙によって朦朧とした空で、大地の埃を投げ上げつつ、樹木を倒しつつ風が動き、太陽は激しくない光線で照らす (9)。ヴァーユに属する地震があると、穀物・水・森・薬草が減ぶといわれる。腫れ物・呼吸困難・精神錯乱・熱病・咳が生ずる。商人が害を被る (10)」) 訳は矢野・杉田 [1995 : 142]。

(えざき こうじ：人間文化研究所 客員研究員)